

松本紘京都大学総長御退任に寄せて



文部科学大臣
下村 博文 しもむら はくぶん

松本紘先生が京都大学総長を務められた6年間は、まさに、国立大学法人制度が始動期から定着期へ移行し、さらに改革の加速を通じて、より個性豊かで魅力ある国立大学の実現に向けた発展期へと移行する、国立大学の極めて重要な転換期にも重なります。

この間、松本先生が、常に先頭に立たれ積極的かつ大胆な大学改革を種々進めてこられたことは衆目の一致するところでした。

学域・学系制に向けた取組などの全学的組織改革、国際高等教育院、総合生存学館(思修館)の設置や白眉プロジェクトなど国際的に活躍できる優れた人材や研究者を育てるグローバル化戦略の実行、ノーベル生理学・医学

賞受賞の榮譽に輝いたiPS細胞研究の中核研究機関や新学術領域を創出する学際融合教育研究推進センターの設立など卓越した研究体制の構築等々、その御業績はここに尽くすことはできません。松本先生が世界の学術研究をリードする京都大学をさらなる高みへと押し上げるべく、リーダーシップを発揮されたことに深甚なる敬意を表します。

また、松本先生には、国立大学協会会長として、我が国の国立大学全体の発展のためにも並々ならぬ御尽力を賜りました。ここに、心より感謝申し上げます。

松本先生の今後益々の御健勝と御活躍を心よりお祈り申し上げますと

もに、京都大学におかれては、これまでの伝統と実績を礎に、松本先生が進めてこられた諸改革の成果を確かなものとし、さらなる発展を遂げられることを期待いたします。



原点を大切にされた松本総長の時代

衆議院議員(前 衆議院議長)
伊吹 文明 いぶき ぶんめい

松本紘先生の総長時代の思い出は、京都大学の諸々の予算確保についてご一緒に努力したことでしょう。分けでも新しい研究開発を進め、その技術を実際にビジネス化する大学発ベンチャーの基金(官民イノベーションプログラム千億円のうち京都大学二百九十二億円)の獲得でした。

この予算については、当初京都府・市も充分な情報がなく、大学が独自で動いておられたような印象でした。京大の経営協議会委員であられた堀場雅夫さんがこの状況に危機感を抱かれ、何度もご連絡を受け、文部科学省とも話し合い、四大学全体で千億円の出資枠を決めたときの松本総長のお顔を今でも思い出します。

しかし、問題はむしろその具体的執行にあります。学問の研究をどう企業化するのか。その目利きの能力のある人材をどう見つけるのか。松本先生や知事、市長、経済界の方々や朝食会で意見交換し、文部科学省に松本先生は何度も足をはこばれた御苦労は大変なものがあったと思います。

私個人の意見を述べれば、大学はバランスのとれた知識人、矜持ある教養人の供給基地であって欲しいと思います。如何に専門分野のみに秀でていても、大学外の社会システムに対し、フィージビリティの低い人材はなかなか適応が難しいのではないかと思うからです。

松本先生はリベラルアーツの大切さ

を充分理解され、分厚い教養を身につける体制創りにも意をいいられたのには、我が意を強くしたものです。国際化に対応する体制の整備や現実を忘れぬ政府との折衝等、本当にご苦労様でした。

我が母校・京都大学が学問の自由を護りつつ、学問の自由と管理権の自由とを混同することなく、松本先生の育てられた苗を大きく育てて頂くことを願っています。



科学技術イノベーションと宇宙政策の進展に向けて

参議院議員

(元 内閣府特命担当大臣: 科学技術政策担当, 宇宙政策担当)

山本 一太 やまもと いちた

松本前総長は、長年に渡り世界をリードする大学づくりに邁進されました。その偉大な功績に心から敬意を表し、日本国民の一人として心からの感謝を申し上げたいと思います。

前総長には、私が第二次安倍内閣の内閣府特命大臣として科学技術イノベーションや宇宙政策を担当していた約2年間、様々な分野で多大なお力添えをいただきました。

たとえば、科学技術担当大臣として、総合科学技術・イノベーション会議(CSTI)のもとで、安倍総理の目指す「最もイノベーションに適した国」の実現に取り組んでいた際には、松本前総長から、イノベーションの源となる人材育成、大学改革、CSTIの機能強化等に関して多くのアドバイスをいただきました。最も印象に残っているのは、平成25年3

月、大臣と若い研究者との意見交換の場である「ふるさと車座トーク」を京都で行った時のことです。松本前総長と学術研究の苗木である若手研究者「育成の重要性」について議論を交わす場面がありました。

研究者間の激しい競争と自由な研究環境の双方を盛り込んだ画期的な「白眉プロジェクト」について熱い思いを語っておられた前総長の姿が忘れられません。さらに、CSTIが科学技術政策を俯瞰した「司令塔」機能を発揮するためには、各省の提案に対する調整ではなく、一段高い立場から調査審議を行うべきだという貴重な御示唆もいただきました。前総長は、教育者かつ研究者であると同時に、あらゆるものに挑戦し乗り越えていくイノベーターであると強く感じたものです。

加えて、前総長は、宇宙エネルギー工学、

宇宙電波工学、宇宙プラズマ物理学の権威であり、その広い識見を宇宙政策委員会の議論でも十分に発揮していただきました。資源やエネルギー問題に対する宇宙太陽光発電の利用可能性、宇宙を利用した防災・災害対応など、人類が直面する地球規模課題に対する取組の必要性を繰り返し説かれていました。同時に、人材育成などの国家として長期的に取り組むべき宇宙戦略についても、様々な御指摘をいただきました。宇宙政策委員会の宇宙産業部長として、我が国宇宙産業基盤の維持・強化といった幅広い観点からの意見のとりまとめにも尽力いただきました。今後とも、宇宙政策委員として引き続きその識見を我が国の宇宙政策の企画・立案に生かしていただきたいと思ひます。



地域に開かれた京都大学

京都府知事

(京都大学経営協議会 委員)

山田 啓二 やまだ けいじ

松本先生が総長に在任された6年間は、時代や環境が大きく変化した激動の時代でありましたが、松本先生は卓越したリーダーシップを発揮され、京都大学を未来指向の大学にすべく、新たな試みに次々と挑戦し、実現されました。

私にとって特に印象深いのは、京都の行政・産業・大学・文化芸術・メディアの代表らで構成する「京都の未来を考える懇話会」において、松本先生とご一緒し、30年後に目指すべき京都の姿を3年間にわたり議論し、「京都ビジョン2040」としてとりまとめたことです。この中で、松本先生は「大学のまち・京都」を重要な柱として提示され、センター・オブ・コミュニティ(COC)と

して地域貢献・地域の課題解決に向き合う大学の使命を明確なビジョンとして提示いただきました。京都大学をはじめとする大学の将来は地域とともにあるという姿勢を打ち出され、「世界交流首都・京都」に向けて大きな一歩を踏み出すことができました。

実際、京都大学と本府との連携も格段に充実いたしました。COI拠点としての先端的な研究開発の推進、けいはんなオープンイノベーション拠点活用に向けた協働パネルの設置、実践的な地域課題解決力を学生が習得するCOCOLO域教育プログラムの展開、大学・本府ら5者による国家戦略特区への提案など、京都において先進的な産学公連携の取組が展開しております。

この他、日本の将来を見据え、「心」の問題やサバイバル技術実習、さらには教養科目のあり方まで、真理の探求を行う学問の府として、次世代をリードする大学のあり方を追究されるなど、ノーベル賞受賞者を輩出されてきた京都大学の新たな挑戦が地域貢献に結び付き、京都の発展にもつながるだけに、地元自治体の長として誇りに感じているところであります。

輝かしい功績を生み出された松本先生に心から感謝申し上げるとともに、今後も京都大学が開かれた大学として、世界や地域との連携を一層深めていただくよう心からお願ひ申し上げます。



松本紘先生の高い志と改革力に感謝を込めて

京都市長
(京都大学経営協議会 委員)

門川 大作 かどかわ だいさく

松本紘先生、京大総長としての6年間、世界に冠たる京大のビジョンを明確に示し、様々な課題に志高く挑戦されての偉大な御功績に心から敬意を表します。

松本先生の総長就任は、私の京都市長就任と同じ平成20年であり、僭越ながら、立場は違えど、京都の、そして日本の未来を共に切り拓いていく同志のような気持ちで私も挑戦してきました。「京都の未来を考える懇話会」をはじめ、様々な場で御一緒させていただく度に、卓越した識見と高潔なお人柄、信念を貫く姿勢に触れ、深い感銘を受けました。特に、若い頃の御苦労とそこから生まれる人間的な深み、社会的弱者への優しいまなざしに強く心惹かれまし

た。松本先生と言葉を交わす一瞬一瞬が、大いなる学びの機会でありました。

人口減少や国際的な大学間競争の激化、日本の国際的な地位等々、環境が激変する中、松本先生は類稀なるリーダーシップを発揮され、人物本位の入試改革、教養教育の改革、そして社会の先頭に立つ「人財」の育成を目指す大学院改革など、大胆な大学改革を、議論を尽くして断行されました。また、「学問は社会に貢献する、イノベートしていくものでなければならない」との理念に基づき、産学公連携、地学公連携を一層促進され、様々な形で京都の活性化や地域の課題解決に貢献いただきました。京都市成長産業創造センター設立に当たって、経済産業省でのプレゼンテー

ションで、松本先生と私が論陣を張ったことも大変印象深いです。

世界トップ水準の大学でありながら、これまで以上に地域に貢献する大学を目指す。このような松本先生と京大の理念を共有し、未来のためにあらゆる分野で京都市と京大との連携を深め、日本と世界に貢献したいと念じています。

自らを鍛え、自らを恃みとする「自鍛自恃」を日々実践されている松本先生。益々の御活躍を祈念いたしますとともに、世界から京都を俯瞰していただき、引き続きの御指導をお願い申し上げます。



Science 2.0 時代と大学の革新

国立大学法人政策研究大学院大学 教授,
独立行政法人科学技術振興機構 研究開発戦略センター 副センター長
(前 京都大学経営協議会 委員)

有本 建男 ありもと たてお

2014年10月京都で、日・EU科学技術政策フォーラムが開催された。科学技術政策、大学、研究機関の幹部が集まる刺激的な議論の場となった。テーマは、EUの強い希望で、“Science 2.0 : Science in Transition”であった。この概念はわが国ではまだ聞きなれない。デジタル技術の発達、グローバル化、地球規模問題への対応等を巡って、過去数百年つづいてきた近代科学の方法、大学体制などが、教育研究の上流から下流まで、今大きな変革を迫られているという設定である。この過渡期にどう対応するか。何を残し何を革新するのか。日・EUの双方で知識と経験を共有し、新しい科学のデザイン、将来の共同研究に発展させたいという企画で、議論のポイントは、more sharing, more actors, more data, そしてivory tower, publish

or perish 文化の変革、policy makerの新しい役割であった。

来年公表予定のOECDの新イノベーション戦略では、social innovation, inclusive, people, sustainableなどが柱になりそうである。また、Inter-Academy Councilも近々、大きな反響を呼んだ“Responsible Conduct in the Globalized Scientific Enterprise”の改訂版を出す予定である。世界の科学界は猛烈なスピードで動いている。

わが国は、2011年の東北大地震・津波・福島原発事故を受けて、科学と社会、科学と人間、大学と科学者の役割・責任について、議論が深まる兆しがあったが、残念ながら今やその空間はほとんど閉じてしまった。多くの大学人は、再びivory towerの専門の檻の中に入ってしまったのか。

松本総長はその6年で、京都大学が世界トップクラスの大学としてグローバルな激変に対応するために多くの布石を打たれた。一時代を画したのである。「継承と革新」は組織の基本である。大転換の潮流の中で、京都という独創的な地から世界に向けて、深い思索と歴史観、世界観をもち俯瞰的視座から、世界と時代に切り結び、次の世代のために新しい大学像を形成し実践して行くのは京都大学と大学人の責務であろう。

「京都大学はよほど意識しておかないと、一地方大学になってしまう」。元総長岡本道雄先生の遺言である。京都大学は、日本の大学制度全体の浮沈を担っているのである。松本総長の後継者たちは強い意志と覚悟をもって、次の厳しい時代に対峙して欲しい。



感謝を込めて

独立行政法人日本学術振興会 理事長, 学校法人慶應義塾 学事顧問
(前 京都大学経営協議会 委員, 前 京都大学 総長顧問)

安西 祐一郎 あんざい ゆういちろう

松本紘先生が京都大学総長になられた頃に慶應義塾の塾長をしていた関係もあって、多くの機会にご指導をいただってきた。

将来を見通す合理的な思考と意思決定的確さ、繊細さと気遣い、芯の強さと一貫性、つまり知と情と意のすべてをトップレベルで発揮できる人は稀だが、松本総長はそのごく稀な例にあたる。

だからこそ、歴史ある京大の内部改革を揺らぐことなく断行し、その一方で、岐路に立つ我が国の大学の道筋を示すまとめ役として、八面六臂の活躍を続けることができたのだと思う。

伝統大学の学長ほど割に合わない仕事はない。とくに、国内外の多くの

活動の先頭に立ちながら、組織、教育、人事労務など、最も大切で最も困難な内部改革を進めることは、至難の業である。教職員にとっては、国内屈指と信じて疑わない現在の研究教育環境を変える必要がなぜあるのか、考える動機すらない。学内から抵抗の出にくい範囲で多少の改善や調整をすることが、ふつうの学長の言う「改革」であった。そういう時代が長く続いた。しかし、このやり方では、日々努力を続けている世界最高水準の大学群と真に肩を並べることは不可能である。

こうした困難を乗り越えて、学内による自治を誇りとする京大を率い、学部教育、大学院教育、若手研究人材の養成、入学者選抜、組織再編などの改

革を多くの協力者の方々とともに次々と進めながら、国立大学法人化後の時代の曲がり角を大学改革の先頭に立ってきた松本紘先生に、あらためて感謝の拍手を送りたい。そして、これまでの経験を活かし、我が国の将来のためにさらにご尽力いただくことを念じたい。



「行動する」国立大学協会会長、松本先生

一般社団法人国立大学協会 専務理事

一井 眞比古 いちい まさひこ

松本先生は、会長就任当初から日本の高等教育の最重要部を担っている国立大学の価値を今まで以上に高めなければならぬという強い意志と使命感を私たちに感じさせました。そのひとつは会長就任あいさつです。「行動」、「先導」、「協働」の3つのモットーをかかげられ、多様性豊かな国立大学の教育研究機能強化を宣言され、学長の方々に今までにない前向きな印象を与えました。

国立大学の発信力にも松本先生は大きな関心を持っておられ、国立大学協会の広報誌のひとつであった「JANU」のタイトルの検討を副会長・広報委員長の羽入先生(お茶の水女子大学長)に指示されました。私も学長だった頃、自大学の現状報告資料に添えて

「JANU」を国会議員の方々に持参した折に、その表紙を見て「これ、なに?」と聞かれたことがありました。委員会で検討した結果、広報誌のタイトルは2013年10月から「国立大学」になり、国立大学協会の広報誌であることが一目でわかるようになりました。これは、「行動する」松本先生のひとつの現れですが、文部科学大臣や与党幹部とことあるごとに面会され、国立大学の要望等を直接に伝えられたのは、まさに「行動する松本先生」そのものでした。

松本先生の著書「京都から大学を変える」の中で、武道でよく知られている言葉「守破離(しゅはり)」に触れておられます。師から学び、師の殻を破り、師から自立するまでの段階を説いたもの

です。西欧社会をモデルにしてきた私たちにとって、「離」のむつかしさを実感してかなりの年月を経っていますが、それを乗り越えられるのは、高度の専門知力だけではなく、深い教養と幅広い基礎学力をそなえた人材です。そのような人たちが新しい価値を創造してくれるのです。若いころに武道を楽しんだ私は心地よい共鳴を感じました。

国家にとって人材が最大かつ最強の資源です。高等教育への高い見識と日本社会の将来に大きな期待と展望を持っておられる松本先生は、国立大学関係者にとってかけがえのない人です。「行動する」国立大学が新しい価値の創造と明日の日本の社会を拓くと私も信じています。



松本前総長ご退任にあたって

公益財団法人稲盛財団 理事長
(京都大学 総長顧問, 京都大学 名誉フェロー)

稲盛 和夫 いなもり かずお

松本前総長には、ご在任中、弊財団の運営に大所高所よりご指導いただきましたことに心より御礼申し上げます。

私共が初めて松本先生にご協力いただきましたのは、財団設立20周年の記念フォーラムでした。当日は京都賞歴代受賞者による基調講演に加え、「科学と人類の未来」をテーマに、多様な分野から日本を代表する研究者を迎えてパネル討論を実施いたしました。その際、生存圏研究所長であられた松本先生にもご参加いただき、闊達なご発言と的確なご指摘で討論を盛り上げていただきました。

京都大学総長ご就任後は、弊財団が小・中・高校生対象に実施いたします教育イベントや市民対象のイベント

の開催に、大学の施設を拝借したり後援いただく等、ご協力を頂戴してまいりました。さらには京都賞の認知向上にも配慮いただき、受賞分野を対象に国内外の研究者を招聘して実施する『京都大学—稲盛財団合同京都賞シンポジウム』をご提案いただきました。多くの方々が京都賞への期待と関心を高め、世界中の研究者が本賞を目指して精進されるようになれば、人類社会の学術・芸術の振興と地球社会の調和ある共存に更に貢献できるのではないかとのご発想は、私共に対する深いご理解があつてのことと、力強い応援を本当に嬉しく思いました。平成26年7月には第1回目が実施されましたが、その素晴らしい運営と共に、松本先生

にいただいたご縁に感謝し、今後も京都大学様との絆を深めてまいりたいと強く感じた次第でございます。

京都大学の自由の気風を自ら体現し、学内外で積極的に発言・行動されながら、日本を代表する教育・研究機関として大学を大きく発展してこられたご功績に心より敬意を表します。また、私共財団に対して、常に思いやりをもってご意見やご提案をいただきましたことにも、心より感謝と御礼を申し上げます。今後共健康に留意され、益々のご活躍を祈念申し上げますと共に、引き続きご指導を賜りますようお願い申し上げます。



明るい未来に向かって進め! 京都大学

西日本電信電話株式会社 取締役相談役
(前 京都大学経営協議会 委員)

大竹 伸一 おおたけ しんいち

京都の街を訪れると、ふと学生時代を思い出す。当時は日本中に大学紛争が起こっており、大学の自治や産学協同研究の是非など良きにつけ悪きにつけ大学のあり方を議論し、また社会に一石を投じようとする活気が学内外に満ちていたように想える。

それから四十数年経ち、経済のグローバル化とともに大学の果たす役割は益々重要になっている。英国教育専門誌の発表では、今年の大学世界ランキングで京都大学は59位だった。教育水準は国力を測る重要な指標である。大学は優秀な学生を集め、グローバルに活躍できる人材の育成が大切になってきている。こうした人材を育成するためには大学の幅広い改革の推進

が必要である。松本総長は総長就任以来、今後の大学の進むべき方向性を明確に打ち出し、実行に移してきた。学生が幅広い教養を身につけるための「国際高等教育院」の設置や優秀な若手研究者を招聘するための「白眉プロジェクト」更には次世代のグローバルリーダー育成のための「総合生存学館(思修館)」の設立を始めとして構造改革を推進し、学内外に一石を投じるその戦略性にはただ脱帽である。

松本総長は大学の現状に危機感を持ち議論を重ねるとともに、議論だけで実践の先送りは大学改革を遅らせるだけとの信念のもと戦略的な構造改革を決断されており、その強いリーダーシップに敬意を表したい。今後これら

の施策が全学一丸となって推進され、一層の成果が得られることを期待している。

松本総長は幾つになっても好奇心、向上心をもっておられ、息抜きにゴルフにお誘いした折でも、時間を見つけて練習してプレイに臨まれる姿勢はなかなか小生には真似の出来ないことである。総長在任中は激務の連続であり、自由な時間をとることもままならなかったと思いますが、今後とも健康に留意され、京都大学の明るい未来のため引き続きご尽力をお願いします。六年間本当にありがとうございました。



松本総長と「鼎会」の創設

株式会社三井住友フィナンシャルグループ 取締役会長
(京都大学 監事(非常勤), 京都大学鼎会 会長)

奥 正之 おくまさゆき

私が松本総長に初めてお目にかかったのは2009年3月、京都大学の銀行取引の主力銀行の頭取として、新総長へのご挨拶に大学本部にお伺いした時であった。力のある眼光と大きな構想力そして鋭い洞察力が印象に残った。

2011年に私が銀行頭取から現職に就き、経団連副会長として対外活動に軸足をシフトするなかで、総長とは東京で産・学関係者が意見を交わす「日本産学フォーラム」或は「産・学・政・官」の各層が集う勉強会等の場でお会いする機会が増えた。

そこでの議論を通じて大学教育の現状と課題の認識を深める中で、ある時総長より、やる気のある学生或は研究員のモチベーションを高めるための

ちょっとした工夫や仕掛けを実現するための物心両面にわたる支援体制が組めないだろうかとの問い掛けを受けた。京大生は群れないことを誇りにしているとの見方もあるが、ここはOBの一人として一肌脱ごうと思い、早速数人の先輩財界人に相談してみた。反応は、松本総長は母校を世界トップクラスの「知」と「学」の Center of excellence とするべくリーダーシップを発揮し革新的なプロジェクトを具体化する等、実に良くやっておられるとの評で一致し、是非協力しようということになった。

協議の末、まずは卒業生で現在現役の企業トップ(社長・会長・副会長)をメンバーとして、毎年ポケットマネー程度の金額を京大基金内の「総長リー

ダーシップ支援基金」に個人拠出して頂き、総長の「思い」の実現を側面支援することになった。大学から「鼎会」と命名頂き、難航した名簿作りも人が人を呼んで会員約150名になったところで、2012年1月、初代会長に和田NTT会長(当時)が選出され、晴れてスタートに漕ぎ着けた。

2015年2月より私が会長を引継ぐことになり、松本総長にはご退任後も本会名誉顧問として運営上のアドバイスをお願いしているが、山極新総長にも強いリーダーシップの下、鼎会会員との「対話」とその「浄財」を母校の「継続的な進化」のために役立てて頂くようお願いする。



松本紘総長の功績

学校法人城西大学 理事・大学院センター 所長
(元 文部科学事務次官, 元 京都大学経営協議会 委員)

小野 元之 おのもとゆき

松本紘総長は、第25代京都大学総長として、京都大学の発展に全力で取り組み、また平成25年からは国大協の会長として国立大学改革に尽力された。

総長は工学部出身者でありながら、中国の古典や漢文に詳しい。総長時代の主な功績として、私は2つの画期的な若手育成プログラムをあげたい。その一つが「思修館」であり、もう一つが「白眉プロジェクト」である。いずれも命名は松本総長である。

「思修館」は文部科学省の博士課程教育リーディングプログラムとして最初のオールラウンド型に選ばれているが、そのねらいはグローバルリーダーの育成である。わが国では、ともしれば細分化した学問領域の中で、教授から指示

された狭い分野の専門的知識や技術しか身につけていない博士が多く、企業や官庁の求めに応じ切れていない。思修館は少数精鋭の全寮制大学院であり、専門分野の深い知識・技術だけでなく、関連する幅広い分野の見識を持ち、さらに幅広い教養を身につけた高い「志」を持つ人材の育成を目指している。私も少しだけ思修館で教える機会を頂いているが、そこではチャレンジ精神豊かな優秀な学生が活発な議論を行っており、とても面白い。

「白眉プロジェクト」は、次世代を担う先験的なリーダーの育成を目指し、優秀な若手研究者が自由な環境のもとで5年間継続的・安定的に研究に専念できるよう支援を行うものだ。審査

委員を「伯樂」と名付けて伯樂会議を発足させ、松本総長自身も全員に最終面接を英語で実施するほどの力の入れようである。研究者は終了後それぞれの能力を生かして、京大だけでなく世界に羽ばたいて行くことが期待されている。

松本総長の3つめの功績は、東大とは違った形で京大の伝統を生かし、ガバナンスを明確にして大学の進むべき方向を示したことだ。学部の自治に守られた消極的な大学運営でなく、全学的な発想のもとに京大の未来を戦略的に考え、京都大学を世界に冠たる教育研究大学にするため、全力で大学改革に努力されてきた。心から敬意を表したい。



松本紘総長の思い出

神戸市立医療センター 中央市民病院長
(前 京都大学経営協議会 委員)

北 徹 きた とおる

尾池総長就任4年目から3年間、理事・副学長として、松本先生とご一緒させていただきました。当時、施設、病院、国際交流を担当させていただいておりましたが、特に大学全体の耐震化の仕組みを作る必要に迫られた際に、ご助言を頂き、当時防災研究所長の河田恵昭教授をご紹介いただき、多くの教授の先生方のご協力を得て「京大式耐震診断、その対応(補強)策」を作成して頂いたのが、思い出の一つであります。この京大の耐震化に対する提案書は、当時の文部科学省に取り上げられ、翌年から予算が付き、全国で耐震化が開始されたわけです。無論、京都大学の耐震化が促進したのは、ご記憶のとおりであります。また、良くお話しさせていただく機会もありまして、特に時代に対応した、国際的に通用する、将来のリーダーとなるべき

人材の発掘、その教育について議論したのを覚えております。その頃から、この方は近い将来京都大学を背負って行かれるに相応しい人物であると確信しておりました。第25代総長にご就任後、経営協議会のメンバーとして6年お手伝いさせて頂きました。時代に合った組織の見直し、将来の人材養成の仕組み作りを、勇気を持ったご英断で次々と成し遂げられる手腕に拍手を送っておりました。白眉プロジェクト、思修館、国際高等教育院、iPS細胞発見時、殊に国際特許取得のための対応、iPS細胞研究所の仕組み作りなど素早く対応され、見事に一つ一つ成し遂げられました。

2年前の11月30日「天皇・皇后両陛下と御所で食事に誘われたので、ぜひ来てほしい」というお電話を頂きました。12月3日19時に御所の応接室で両陛下に

お会いしました。総長が、大学ノートを出され、総長のお母さんが、近所の開業医の応接間にあった「ひよこ物語」の本を借りてこられ、大学ノートに写し、それを総長のご兄弟に読んで聞かせておられたと両陛下に説明されておられました。一字一字間違いが無く、一挙に写されたのではと思いましたが、挿絵も素晴らしかったのを覚えています。さすが、この母にしてと思った次第です。その後食事、さらに食後のお茶と進みましたが、総長のお話が面白く、両陛下のご質問も鋭く、約束の時間を30分過ぎました。最後は玄関までお見送りを頂くという事になりました。何という機会を与えて頂いたかと今でも感謝に堪えません。総長とお仕事をさせて頂いたことを良き思い出にさせて頂きたく思っております。長い間、本当にご苦労様でした。



新たな知のランドマークへ

武田アンド・アソシエイツ 代表、
文部科学省 参与、京都大学 特任教授

武田 修三郎 たけだ しゅうざぶろう

世界のグローバル化は待ったなし。それどころかウォールストリート紙が「過去50年に起こったより今後5年で起こる変革の方がさらに大きい」(2014年8月)と報じる通り、新時代への動きは間違いなく加速される。このためにはそのかじ取りや骨格作りを行える人たちを作る「育人」が必要。幕末や明治にあれば育人先進国であった日本が今回はこれができるどころか、アジアの国々にも遅れをとりだした。なお、前回の育人は松下村塾や適塾が担ったが、今回は大学がこれを担う。事実、世界ではこれらに取り組む大学が続出しだした。彼らは、先端研究体制づくりだけでなく、新時代への育人体制づくりにとりかかった。つまり、過去の

栄光のノーベル賞受賞者づくりでなく、未来を導く多くのイノベーターづくりにかじ取りをきったのである。また、過去の象牙の塔の殻を捨て未来へ導き、変化に戸惑う政府、国民を照らす知のランドマークへの変革を遂げだした。

これら命題に真正面に取り組み、京大だけでなく日本の大学変革の旗振り役を担い、文字どおり粉骨砕身された松本先生には感謝と敬意の念を表す。この難しさをマキアヴェリは「・・変革推進者は変革で損害を受けるものからは非難されるし、一方、利益を得るものからも感謝されない」(Prince)とした。事実、学内では、松本先生は非難され、一方、積極的な支援者はでなかった。しかし、京大は新体制のもと、間違

いなく変革を遂げる、と私は確信している。これについては先のマキアヴェリも「変革というものは、ひとつ起こると、必ずや次の変革を呼ぶようにできている」とした。

松本先生が取り組まれた変革の中、特に私は新大学院「思修館」、そして海外大学との連携に期待している。前者は、混迷の世界を照らす人づくりを真正面に据えた育人大学院。また、後者は大学に不得手なベンチマーキングを可能にさせ、トラストとオープンネスをもたらす場。いずれも京大を確実に世界のトップランナーにする道と考えている。最後に、松本先生には、今後尚一層、日本を照らすランドマークの役を担ってもらうことを希っている。



未来を創造する力強いビジョンと改革

京都商工会議所 会頭, オムロン株式会社 名誉会長
(前 京都大学 総長顧問)

立石 義雄 たていし よしお

京都大学の総長として、強い信念のもとで大学改革にご尽力され、このたび6年間の職責を果たされましたことに、心より敬意を表します。

松本様は、京都大学の国際競争力を高めるためのビジョンを掲げ、グローバルに活躍する人材の育成を目指した教養・共通教育改革や大学院教育改革など数々の改革を遂行されるとともに、京都のまちにも多大な貢献をいただきました。

本所では顧問に就任いただき、さらに京都の各界代表が30年後の京都のありたい姿を議論する「京都の未来を考える懇話会」に、学术界を代表して参画いただきました。共に議論を重ねた結果は、「京都ビジョン2040」としてとりまとめることができました。

「世界交流首都・京都」を目指すこのビジョンをもとに、京都大学をはじめ、行政、経済界等が具体的な施策を推進しております。人口減少によって、地方衰退への危機感が強まっておりますが、人と人、知や精神、文化や産業の大交流を創り出すことによって、活気と創造性あふれる京都を実現できると確信しております。

私は、「高い文化と学術を有する創造的都市は、その時代の産業に革新を起こす」と考えておりますが、長い歴史の中で革新を繰り返し、新たな伝統を創造してきた京都は、まさにそういった都市であります。

松本様は、京都における大学の役割について着目され、京都大学の知恵を活かして地域の課題を解決するCOC事

業も推進されました。地域に貢献する大学として、京都大学の存在感は一層大きくなったのではないかと思います。

京都産業の基盤は、伝統・先端産業の高度なものづくり技術と、大学や研究機関の最先端の知恵の集積であり、産学公の連携を円滑にする「知恵インフラ」が強みといえます。その中心を担う京都大学には、これまでの改革を継承し、グローバルとローカルの2つの世界で活躍する人材の育成を推進されるとともに、世界をリードする大学としてさらに発展されることを期待しております。

結びに、松本様におかれましては、今後とも京都の発展にご支援、ご協力いただきますとともに、ますますご健勝にて、一層ご活躍賜りますよう心よりお祈り申し上げます。



「京都学プログラム」成功の立役者、松本総長

あしなが育英会 会長

玉井 義臣 たまい よしおみ

平成26年1月7日、私が「本会の『京都学プログラム』にご協力ください。」とお願いすると、松本総長はご快諾くださいました。驚くくらいの即決でした。

私共「あしなが育英会」は、約50年間、親を亡くした遺児の教育支援を物心両面に渡って続けて参った団体です。平成26年夏、世界のトップ100大学から100人のインターン生を招いて3か月に渡るインターンシップ・プログラムを行い、その一環として「京都学プログラム」を開催しました。

その目的は、昨今ますます格差が広がり厳しくなる一方の遺児を取り巻く環境を根本から変えるために、「弱者を労わる心」と「日本の心」の両方を持った世界のリーダーを育てようとい

うものです。

この「京都学プログラム」を決して単なる観光にせず、真の意味での「日本理解」につなげるため、アドバイスを得ようと京都大学の門をたたいたわけです。松本総長は即座に我々の意図を理解し、名だたる教授陣に呼びかけ、素晴らしいカリキュラムを提供してくれました。

結果は大成功でした。「京都学プログラム」の参加インターン生らが提出したレポートには、こちらが期待していた以上の深い日本理解と感謝と賞賛の言葉があふれています。この中から、十年・二十年後に、世界を良い方向に変えて行くリーダーが生まれることを心から願っています。

松本総長は閉会式にも出席され、学生達に「京都での学習を楽しみ、自信を持ち、必ずやってくる大変なジレンマに打ち勝てるリーダーになってください。」とエールを送りました。京都から世界のリーダーを育てようとする松本総長こそが、志高く、弱者に温かく、しかも日本の心を持った真のリーダーであると思います。

このたび、松本総長は本会の「アフリカ遺児教育支援百年構想」を支えるサポーターである「賢人達人」への就任もご快諾くださいました。今後、松本総長と共に、この活動を通じて世界の貧困削減に貢献していくことを、心から楽しみにしております。



幅広い教養や経験を総動員する イノベーション創出の取組み

文部科学審議官

土屋 定之 つちや さだゆき

2年前、常識や既存の枠組みにとらわれない、真に革新的なイノベーションの実現を目的とする新たなプログラムを創設するため、松本総長にご意見をおうかがいしました。先生が重要とされた要素は、ビジョンとアイデアです。イノベーションには、「先端」も大事だが、「ローテク」+「ビジョン」+「アイデア」で起きると、スティーブ・ジョブスの成功例をあげつつ、ご指摘されました。関連して、お話されたのが、1901年1月に報知新聞に掲載された「二十世紀の豫言」です。100年以上前の日本人は、クレジットカードやFAX等将来の夢が描けているが、現代の日本人には描けないのではないかとの問題意識でした。松本総長は、“以前は「必要

は発明の母」と言っていたが、最近では「発明は必要の母」の感がある。技術があるから誰か使ってください、ではなく、幅広い教養や経験を総動員して、何が必要かをまず考えるべき」と仰り、その上で将来に向けた大きなビジョンを持つ人、ビジョンを強く持った人の構想や情熱が十分に発揮できる場の設定の重要性を指摘されました。

幅広い知識と深い専門性、柔軟な思考力と実行力を重視した「思修館」設立をはじめ数多くの改革を実行されたこと等に基づく先生のお考えは、極めて明確であり、検討中の新規プログラムの柱をしっかりとさせることが出来ました。

文部科学省では、平成25年度新規

施策として、幅広い教養を土台として、誰も考えつかなかった「人や社会に関するビジョン」を構想し、その実現を目指して果敢に挑戦する新たな試みを開始しました。可能性は低いですが、目標を達成した場合、より大きな価値や利益を得る研究活動を促すもので、活発化する世界の活動の中で低下傾向にある我が国の研究開発の取り組み方を改革することに繋がると確信しておりますが、簡単には、状況を改革できるものではありません。松本先生には、日本が再び輝くため、今後とも、より革新的に、より高いレベルで、挑戦的な取り組みを強力にリードしていただくよう、お願いいたします。



稚気愛すべし、松本紘前総長

立命館大学 教授

(前 京都大学経営協議会 委員)

土岐 憲三 とぎ けんぞう

松本紘先生が総長として京都大学に多大の貢献をされたことは、大学内外の多くの人が語るどころである。これには鋭い先見性と強いリーダーシップが必要なのは言うまでもない。こうしたことは他の人々に譲り、ここでは、別の視点からの松本先生のお人柄を紹介しましょう。

松本先生とは長いお付き合いではあるが、頻繁に出会うことが多くなったのは、先生が宇治のセンター長、研究所長の頃であり、自分も各種の役職に携わっていたので、学内の委員会などでご一緒する機会が増えた。その頃には二人は共に鞆、カメラ、携帯電話等の小物フェチであって、新しいものを次々に手に入れる競争をしていた。学内の

会議で研究室を離れている時に、松本先生が工学部の研究室に訪ねてこられ、秘書に何か小物を見せて、「土岐先生はこれを持っていたか？」と尋ね、秘書が「お持ちでないと思います」と答えると、「そうか、勝ったな」と嬉しそうに帰って行かれました、と報告されたのも一度ならずであった。

ある時は秋葉原の店で面白そうな鞆を見つけて買おうとしたけど、少し難点があって買わずに帰った。数日後に学内の委員会の際に、改築前の時計台の大会議室の鞆置きの上に件の鞆を見つけた。こんなものに眼をつけるのは競争相手しか居ないから、会議が終わってから「買ったんですね、私は止めたものを」と冷やかしたこともあつ

た。まるで子供のように、新しく手に入れたものを互いに自慢しあっていた。

また、15、6年も前のことであるが、その頃に海外に出張された後の学内の会議の際に、長さが1m余の軽い棒状のものを土産として渡された。何かと開いてみると、プラスチックの靴ヘラであった。「先生は背が高いから、これならあまり届まなくても良いでしょう」とのことであった。そういう心遣いをする人なのである。

総長就任後は、学内のいくつかの委員会に学外委員として就任したが、そこでの会議等では仕事を離れたときとは違った面を見ることも屢々であり、総長職の重責を窺い知った次第である。



松本紘先生の総長ご退任にあたって

国立大学法人名古屋大学 総長

濱口 道成 はまぐち みちなり

私が松本先生に初めてお目にかかったのは、2009年の春、国大協の総会であったと記憶する。先生の第一印象は、正に強直にして触れば切れる日本刀の名刀のようであった。しかし、面識を深めるにつれ、先生が深い愛情と冷静な視点を持つ方であることが、私に染み渡るように伝わってくるようになった。以来5年余、私にとって、先生は様々な局面で最も影響を受け、示唆に富む指導を頂いた方である。

先生は、この5年間、大胆な改革によって京都大学を引っ張ってこられた。先生の発案された「白眉プロジェクト」や「思修館」は、日本の大学・現代の高等教育が持つ課題に対し、「若いリーダーを如何に育成するか」という明確

なメッセージを持つ対策として提示されている。多くの大学長がこれらの構想に、啓示を得たに違いない。私も、先生の構想のお話を聞きつつ、名古屋大学なりの改革を探り、「YLC」やリーディング大学院プログラム「登龍門」や「ウエルビーイング・アジア」を立ち上げることができた。

2013年6月より、先生が国立大学協会会長に就任され、私も筆頭副会長として、お仕えすることとなった。まじかに接する先生は、以前にもまして深い戦略と行動力を持つ方であることを実感することとなった。先生は、多様性に富む国立大学協会を、1人1人の発言を十分引き出しながら、第3期中期計画に向けての課題をまとめられた。また

2013年末には、率先して行動され、科研費の大幅減額の危機を未然に防がれた。

先生と知己を得たことは、私にとってかけがえのない体験である。ネルソン・マンデラの言葉に、「I learned that courage was not the absence of fear, but the triumph over it. The brave man is not he who does not feel afraid, but he who conquers that fear.」とある。様々な苦難、体験を通して勇者となった人の姿を、私は先生の中に見る。

変革期にある日本社会は、先生を必要としています。松本先生が、引き続きご活躍されることを、心より祈念いたします。



松本紘先生の熱き思いに

国立大学法人東京大学 総長

濱田 純一 はまだ じゅんいち

松本紘先生におかれては、6年間の京都大学総長職という大任を見事に果たされたことを、まずはお祝い申し上げます。この6年の間は、東日本大震災や政権交代、さらには急速なグローバル化など社会の大きな動きもあり、その中で国立大学の財務環境はさらに厳しくなる一方、国立大学に対する期待は高まり、こうした状況に対応すべく大学改革ということがつねに大きな課題となってきました。この激動の時期に、その卓抜したリーダーシップを持って向き合ってくれた松本先生に敬意を表すると同時に、先生とさまざまな機会に率直に語り合い、ともに課題に立ち向かうことが出来たことを、感謝申し上げたいと思います。

とくに国立大学協会の活動においては、松本先生には、平成25年6月から会長職を引き受けていただきました。私の会長時代にも副会長として活躍をいただき、とくに、国立大学が責任をもって果たすべき役割や機能の強化のあり方を主体的に打ち出した「国立大学の機能強化」の考え方の展開にあたって、大きな役割を果たしていただきました。また、会長ご就任後は、大学のガバナンス改革の議論や厳しさをまず一方の財務環境などの課題をめぐり、先頭に立って精力的に要望活動などを展開されたことは記憶に新しいところです。

国立大学の中でも、とくに京都大学と東京大学の動きは、社会からの注目

度も高く、日本社会の活力の強化を学術の面から担いながら、国際社会の中で存在感を示していくべき役割は大きいものがあります。そうした役割への期待がこれまで以上に高まってくる中で、同じ危機感をもって大学運営に取り組む松本先生との時折の懇談は、大きな励ましとなるものでした。そうした時にいつも感じていたのは、日本の未来、そしてそれを支えるべき国立大学の使命についての、松本先生の熱い思いと責任感でした。

松本先生の今後のさらなるご活躍、そしてご健康を、心より祈念申し上げます。



松本前総長のご退任に寄せて ～魅力あふれる改革のリーダー

消費者庁長官(前 文部科学審議官)
板東 久美子 ばんどうくみこ

松本前総長には、高等教育局長、文部科学審議官時代を通じ、大変お世話になりました。私の部屋にもしばしばおいでになり、京大の改革の取組や課題について、あるいは政策へのご提言を熱く語られました。そのアイデアの豊かさは飛び抜けており、お会いする度に大きな刺激と新たな視点、前進のエネルギーをいただきました。積極果敢に挑戦されてきた様々な取組は、まさに大学改革全体を牽引するものとして、各界から大きな期待が寄せられています。

総長として取り組まれたことは、極めて多岐にわたりますが、特に、教育・人材育成機能強化に大きな力を注がれたのが注目されます。国際高等教育院

創設による教養教育の強化、思修館創設をはじめとする大学院教育の質的転換、白眉プロジェクト等による若手研究人材の育成、特色入試導入による大学入試・高大接続改革など、革新的で多様な取組を推進されました。京大において研究に比べると影の薄かった教育を、全ての基盤として重視されたことは画期的だといえましょう。

また、大学のグローバル化の推進にも積極的に取り組まれました。その集約である国際戦略(“2x by 2020”)は、世界の中で卓越したスーパー・グローバル大学としての発展を支えるものです。研究力の強化も理事時代から強力に推進され、山中教授のノーベル賞受賞をはじめ、国際的にも評価される多

くの実を結びつつあります。

総長としてのご業績を支えたのは、類まれな先見性と創造性、発信力と説得力、軽やかなフットワークに加え、精神的なタフさや徹底した積極思考ではないかと思います。それぞれの取組には様々なハードルがあったようですが、相当の困難や反対にもめげないご様子には、いつも感服しておりました。

一区切りを付けられた後も、今までのご経験を活かし、イノベーターとして新たなご活躍をいただきたい。松本前総長という比類なき魅力的なリーダーに接することができた一人として、それを切に願っております。



我が敬愛する松本紘先生へ

国立大学法人大阪大学 総長
平野 俊夫 ひらのとしお

松本紘先生、この度は6年間の総長職を無事終えられたこと、おめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。6年間本当にご苦労様でした。

先生に初めてお会いしたのは2011年の9月であります。大阪大学総長就任のご挨拶をするために、京都大学総長室に先生を訪ねました。初めてお会いした時は、天下の京都大学の総長として大変威厳のある近寄り難いオーラを感じました。しかし先生は大変気さくな方で新米の私に総長職の大変さを語られ、かつ励ましてくださいました。その後も国内はもとより、ドイツ、イギリス、中国、ベトナムなど海外でも幾度となくご一緒させていただきました。先生のお人柄に直接ふれる事が出来た一生忘れる事のない貴重な思い出です。また色々な機会に総長としての心構えや

注意すべき点等、細やかなご指導いただきました。改めて御礼申し上げます。

松本先生は「京都から大学を変える」と、京都大学総長として、また国立大学協会会長として、ひたすら我が国の大学の発展のために大学改革に邁進されました。まさに「行動の人」です。なかなか簡単にはまねを出来るものではありません。

先生の講演をお聞きしていると、様々な言葉が飛び出して来ます。「先衰国」、「育人」、「異・自・言を鍛える」、「知・胆力を鍛える」など。そして先生は「Kyoto University機能強化プラン」や「2x by 2020の提言」などを発表されるときも、教養部改革や入試改革、若手育成のための「ジョン万プログラム」や「白眉プロジェクト」など、様々な大学改革を実行してこられました。

今、日本は大きな曲がり角にさしかかっています。このような時だからこそ、わたしたちは、未来を担う人材をしっかりと育成して行かなければなりません。国を支えるのは人であり、人材育成が全てであると言っても過言ではありません。先生の「育人」は重く大学人に響きます。そして「知」を鍛える重要さと共に、「胆力」の重要性は今も私の脳裏に焼き付いています。「胆力」こそが、リーダーの資質であり、未来を開く大きな力になりうるという確信は、先生ご自身の「胆力」が故、さらに大きな説得力をもってわたしたちに語りかけて来ます。

健康にはくれぐれも留意され、我が国の将来のために、引き続きご指導、ご助言、ご鞭撻をいただきますようお願い申し上げます。



松本紘前総長御退任に当たって

東京都教育委員会 教育長

比留間 英人 ひるま ひと

京都大学松本紘総長の御退任にあたり、東京都教育委員会を代表して、京都大学並びに松本総長がこれまで推進してこられた様々な取組に対し、心より敬意を表します。

松本総長は在任中、新たな価値創造ができる人材の育成のために、次々と改革案を打ち出されました。「入試改革」では従来の入試とは異なる「高大接続型京大方式特色入試」を導入され、「教養教育改革」では教養教育を一元化した「国際高等教育院」を設置されました。そして、「大学院改革」ではリーダーの育成を目的とした新しいタイプの大学院「思修館」を開設されました。これらの入試改革から大学院改革までの一貫した取組は、日本の教育の仕組みを大きく変えていく先駆けとなるものと思われま

す。とりわけ「入試改革」においては、「高校生には幅広い知識と教養の土台をしっかりと身に付けて欲しい。」との松本総長の強い思いから、「高校と大学の接点を広げ、より

緻密に連携することで、互いの生徒・学生の学習意欲を向上させる。」ことを目指し、高校教育に対して積極的に働きかけをされました。それが見事に結実したのが、平成23年度から京都大学と東京都教育委員会で開催している、「京都大学高校生フォーラム in TOKYO」であると思っています。

この「京都大学高校生フォーラム in TOKYO」では、平成25年度には松本総長から、「人類の100年後を考えよう! ~西暦2100年『太陽系文明』の夜明け~」と題して御講演をいただきました。松本総長の研究分野のみならず、「人間が本来持っている力を十分に発揮するには『学力・額力・顎力・楽力』の『4ガク』が必要である。」等、数々の興味深いお話に、会場を埋め尽くす高校生は熱心に聞き入っていました。会場の生徒から「研究者になるためには、高等学校ではどのような勉強をすればいいのですか。」との質問に対して、松本総長は、「高等学校においては、文科系科目も理科

系科目も幅広く学習することが大切である。」と強く訴えられました。御講演後、「松本総長のような研究者となって、新たな発見をしたい。」との志を抱いた生徒も多かったです。高校生が高等教育とはどういうものかを実感し、進路目標を明確にする取組は大変素晴らしいと感じています。

更に、平成26年7月に、明日の日本を担う人材を育てることを願い、「京都大学と東京都教育委員会との連携協定」を締結いたしました。東京都教育委員会は、松本総長が推進してこられた、「高等学校と大学が互いの現状を理解しながら、共に協力し、高校教育における幅広い学びを保証していくような高大連携」を今後とも継続、発展させていく所存であります。

結びになりますが、松本総長のこれまでの御労苦に心より感謝申し上げますとともに、今後の益々の御活躍を祈念して、私の感謝の言葉とさせていただきます。



松本紘京都大学前総長へのメッセージ

株式会社堀場製作所 最高顧問

(京都大学 総長顧問, 前 京都大学経営協議会 委員)

堀場 雅夫 ほりば まさお

最初から私事を申し上げて失礼かとは思いますが、私は京都大学の一般のOBとは少し違っていると思っています。

まず、私の父は京都大学を卒業して京都大学に奉職し、終戦時まで理学部化学教室の教授を務めておりました。その関係で、京都大学は幼少期より自分の身近にあり、偉い先生方に可愛がって頂き、父の教室の学生さんは私の家庭教師であり、夏休みの宿題もいつも半分くらいはしてもらっていました。

そして、私も当然の様に京都大学の理学部を選び、特に私の尊敬している物理学の荒勝教授のもとに入学出来たことは大変ラッキーでした。

しかし、敗戦により私の将来の希望であった研究者としての夢をぶち壊さ

れました。連合国は日本の核物理の研究を禁止すると同時に、大学の核研究施設を破壊するとの情報を受け、大学としてはそれに対抗する手段はなく、私は卒論の実験用に準備した部品を個人で新設した『堀場無線研究所』に移し、卒論を学外で作成しました。この研究所が現在の株式会社堀場製作所のスタートとなりました。

京都大学と各学部の先生方と共に産学連携して新製品を作り、現在でも製品群のオリジナルの50%は京都大学との共同開発したものです。

しかし、その関係はあくまで点の接点であり、線としていわんや面としての関係ではありませんでした。しかし、松本先生の総長就任をきっかけに、総長顧

問への就任、続いて経営協議会委員委嘱、そして平成25年の総長選考委員就任に及んで、京都大学の内情を知り、現在の世間一般の価値観、常識とはかけ離れた状態で運営されていることを目の当たりにすることとなり、松本総長の大学改革の御苦勞が如何に大変なものであったかを痛感した次第です。

もう少し総長職を続けて欲しいと願ったのですが、再任の禁止規定もあり実現は出来ませんでした。

しかし、幸いにも新総長の山極先生は引き続き改革を続けるの方針を打ち出されておりますので、京都大学の生まれ変わりを心より願い、改めて松本前総長の勇気と忍耐力と努力に心から敬意を表します。



産学の距離が縮まった6年間

公益社団法人関西経済連合会 会長、
関西電力株式会社 代表取締役会長

森 詳介 もりしょうすけ

松本先生は、2008年10月に第25代京大総長にご就任されて以降、留学生の受け入れ拡大をはじめとする大学の国際化や、2013年の思修館創設、2016年度入試からの高大接続型京大方式特色入試の導入など、先駆的な大学改革を矢継ぎ早に推進してこられました。

「人材こそが大学の最も大きな資産」という松本先生の信念は、企業にもそのまま当てはまります。企業にとっても人材こそが最大の資産であり、大学から人材を受け継ぐ立場の企業にとって、京都大学の一連の改革は頼もしく映っています。

松本先生が総長ご在任中に蒔かれた種は、近い将来、必ず大きな実を結

んでくれるものと思います。京都大学で磨き上げられた人材が、研究やビジネスなど広い領域でグローバルな活躍をし、関西のみならず日本の発展を牽引してくれることを、今から楽しみにしているところです。

松本先生は、大学と関西経済界の結びつきも強めていただきました。2009年には国立大学として初めて関経連の会員に登録していただき、今では、外国人留学生の就職支援や人材育成のコンソーシアム構築事業などで互いに協力しあう間柄です。意見交換の場では、経済界の声に真摯に耳を傾けていただくとともに、示唆に富んだご意見を多く頂戴したことが印象に残っています。京都大学と関経連の関係は、松本

先生のおかげでより高度なものとなりました。心から感謝申し上げます。

かつて松本先生から、「大学と経済界のつながりが関西にはない。近くにいなながら協力関係を構築できていない部分がある」と厳しいご指摘をいただいたことがあります。近くにいることに甘えては、経済界にとって最も大切な産学の連携が進まないと感じておりました。今でも覚えています。

関経連では今後も、京都大学とともに関西の発展に力を尽くしてまいります。松本先生には引き続き、関経連の活動に対し、大所高所からご指導を賜りますようお願い申し上げます。



松本先生ご退任に寄せて

DMG森精機株式会社 取締役社長
(前 京都大学経営協議会 委員)

森 雅彦 もりまさひこ

このたびは、松本先生がつつがなく退任の日を迎えられましたことを心より喜び申し上げます。

松本先生と私は、奈良県大和郡山市の出身です。私は1985年に京都大学工学部精密工学科を卒業しました。工学系分野においては産業と民間との連携が重要と考え、京都大学をはじめ国内外の大学や、ドイツFraunhofer協会等との共同研究を行って参りました。今考えますと、この点が松本先生の目に留まり、経営協議会委員への参加をお声がけ頂くことになったのではと考えております。

経営協議会では平成20年からの6年間、2期にわたり協議会委員としてお世話になりました。改革は常に様々な

評価があるものですが、松本先生の取り組みにより、京都大学生の、他大学と比較したユニークさや優位性は大変改善改良されてきたと考えております。なかでも、先生の言う「顎力(がくりよく、噛む力)」には深い意味があると感じ、弊社の社員教育においても念頭において取り組みを行っております。

世界各国に広く活動を行うことと、伝統を守り地域に根ざすことは、反対の事柄のように思われがちです。しかしながら、国や人種を問わずにグローバルであること・日本全土に広がりナショナルであること・地域に根ざしたローカルであることは、決して対立する概念ではありません。京都は観光や歴史、文化において特色のある素晴らしい都

市であるのみでなく、培われた資源を活用することにより、様々な文化背景を持った知の集積となりうる土地であると考えております。私は京都大学が松本先生の取り組みを踏襲し、知の発信地として今後更なる発展を遂げ、世界でも稀有な大学となることを心より期待しております。



日本の京大から世界の京大へ — やればできる —

文部科学事務次官

山中 伸一 やまなか しんいち

OECDの行っている中学校卒業時の知識活用能力を評価する国際的学力調査で、日本の生徒はOECD34か国中、理科、読解力で1位、数学で2位とトップの成績である。このこともあり、国際的には日本の小学校、中学校の教育は世界でも一流と評価されている。

これに対し、日本の大学教育への評価はどうか。TIMES等の国際ランキングで見ても、とても一流とは言えない。知の時代である21世紀これでもいいのか。しかも日本の人口は急減する。どうすればいいのか。「学士力」といった学部教育の改革。大学入試の改革。大学院教育の実質化。20年以上前から同じことが言われ続けてきた。しかしほとんど変わらない。何故か。総論賛成。各論

賛成。しかし動けない。一步踏み出してもその先に進めない、続かない。

松本先生はこのような日本の大学の現状に大いなる危機感を抱いた。抱いただけでなく、具体的な行動に出た。出ただけでなく、更に進めた。京大方式特色入試の全学部での実施。学部教育での教養教育を充実し発信力、英語力を高める国際高等教育院の発足。リーダーを育成する大学院「思修館」の創設による大学院改革。若手研究者を支援する「白眉プロジェクト」、「ジョン万プログラム」など。

大学入試改革。学部教育改革。大学院教育改革。若手研究者育成改革。いずれも重要な改革である。日本の大学社会では重要なことは慎重に検討す

る。重要な事ほど、慎重の上に慎重な検討が必要になり、結果、20年、30年かけても僅かしか変わらない。松本先生はこれらすべての改革を6年間の任期の間に実行した。これらの改革は、大学関係者が長年提言し続けたが実行に移せなかったものである。文部科学事務次官として、松本総長にお会いした時、これらをすべて実行すると言われた。本当に驚き、できる限りの支援をしてきた。

京都大学がこれだけの改革を実行してきたことに対し、松本先生をはじめとする京都大学関係者に心から敬意を表したい。更なる進展を期待したい。やれば出来る。他大学も大いに範として頂きたい。



増々のご活躍を期待致します。

日本電信電話株式会社 特別顧問
(京都大学鼎会 前会長)

和田 紀夫 わだ のりお

私は、鼎会(産業界現役の卒業生有志による総長支援会)の初代会長の任にありました。その事もあり、総長とは多くの意見交換の場を持たせて頂いた。そして、総長の大学経営に取り組む確固とした信念を感じ取った。その信念とは「大学の存在価値は、その存在が人間社会の発展に役立っているかどうかにかかっている。それはまた、変えねばならない事にいかに挑戦するか、変えてはいけない事をいかに死守するかにかかっている」という事だと私なりに受け止めている。総長の業績は、多くの場面で触れられると思うので、私は、鼎会の基金を使い、世に役立つ人材の育成に取り組まれた総長の4つの施策をご披露する事としたい。一

つは、グレート・ブックス・ライブラリーの創設、二つは、世界のビッグネームと直接対話できる場の設定、三つは海外留学への支援、四つは、学際研究構想コンテストの開催である。一と二の目指す所は、世界の古典と自由に向かい合い、また、世界の一流の人々と直に意見交換をする。その事により自らの行動の軸となる自らの価値観を打ち立てる事にある。三と四は今、最も進化、変化の激しいグローバリゼーションとオープンイノベーションの場に身を置き、それに適格に対応するには何が最も求められているのかを実感としてとらえる事にある。

総長は、この四つの施策を“心”を培うための四つの試みであり、これらを

「本質について大胆に」というコンセプトのもとに展開して行きたいと述べておられる。鼎会は、発足後、三年目に入ったばかりであり、その成果はこれからだと考えるが、産業界に身を置ける者として、この取り組みを皆さん高く評価しており、ここから骨太で進取の気に富んだ人材が多数輩出してくる事を心待ちにしている。

私としては、総長の新しい数々の取り組みに敬意を評しつつ、お疲れ様でしたと申し上げたい気持ちの一方、まだまだこれからもう一踏張りしてご活躍頂きたいという気持ちで一杯である。